

編集後記

編集長(ダン シロウ)

●新年早々に能登半島で大きな地震災害が起きた。長くマガジンを発行してきた故の巡り合わせで、「えっまた！」と思った。東日本大震災はマガジン第4号の発行直前のことだった。

原発被災地をのぞけば、被災各地が生活拠点として新しい姿になるのに6~7年かかっていたように思う。

能登各地の回復にもそれくらいかかるのだろう。当然、高齢化の進んでいる地域の被災という面が大きく影響してくるだろうが、それでも人はそこから立ち上がる。それを手伝えることが対人援助学マガジンの枠内にもあるだろう。

時間がかかるのは避けられないから、その中で出来ることを模索するのが非被災地に暮らす者の責務だろう。いろんなメニューが考えられればと思う。

●今回の執筆者短信欄は、高名さん、水野さん、馬渡さんと被災地石川在住の執筆者からの報告から始まっている。是非、ご覧下さい。

●そして今号からの新連載は乾京子さん。子ども文庫活動を長年している人。私の生活圈、ご近所住民でもある。サトウタツヤさんは久々の復活だ。長く続けている「場」は、人が来たり、去ったりしながら、在り続ける。

編集員(チバ アキオ)

社会福祉領域が災害時に担う役割が定着している。全国にある都道府県レベル、市町村レベルの社会福祉協議会のボランティアセンターの運営を代表に有事には福祉人材が各所で活動し、被災地以外からの応援も行われている。国家資格社会福祉士の養成カリキュラムには「災害支援ソーシャルワーク」と銘打ち、1章分学習することが始まり数年たった。私が担当する科目では「避難所の設営」を学生とともに経験する機会を得た。熊本地震での被災地支援、避難所運営経験がある佐藤嘉洋先生(京都光華女子大)が主導し、先生の学生、

地元消防団、地域住民、地元消防署の方とミックスで行なった。実際に開催したのは当初の予定通り2024年1月。その1月に能登で地震があった。地元消防署員の方は、能登への派遣から帰宅後、数日でこの日に私たちのために駆けつけてくださった。「体育館は実際とても寒くて3時間いるだけで耐えられない気持ちになった。同時に、今能登で避難している方たちや今まで震災で避難した経験がある人達はもっと長い間、資源が少ない状態で過ごしているのかと思った。」「率先して行動してくれる人にすべてを任せっきりではいけないという言葉も印象的。被災地では自分にできることを見つけて協力しあうことが最重要だとわかった。生理用品や性被害について、世間ではあまり触れられることがない話題も取り上げてくださって、考えさせられる時間であった。」「実際に避難所は様々な工夫がされている事を学んだ。」「実際に避難所へ行ったことが無いので、今回体育館でシュミレーションしてみて避難所について知ることができた。地域の人たちと考えたりとか、ダンボールのベッドを作って座ってみたりテントを組み立てたり、普段経験出来ないことをすることが出来た。ボランティアについて調べてみたい。」「元々避難所についてほとんど知らなかったのも、実際に現場に行かれている方からお話を聞かせていただいたり、学生などみんなで考えることができて勉強になりました。避難所の中の配置計画では、お年寄りの方は入口に近いところにしたり、体調を崩した際にもすぐに対応できるように休める場所を近くにしたりと工夫が必要だと分かりました。また物資の配布についても、個数が人数より多かった場合や少なかった場合は、優先順位を決めたりすることが大切だと分かりました。もし一人の方が、友達の分までもらうというのは、確認が取れずに混乱してしまい、結果として平等にならないこともあると思います。避難するみんなが少しでも安心して生活できるようにルールを作ることはとても必要だと思います。また生理用品についても、配布の基準が難しいこともあると分かりました。生理用品だけでなく、女性が中心になって動くこともとても大切で、避難所での女性の視点を考えることが必要な時も多いため、私も実際に災害ボランティアに参加したいと思う。特に避難所に避難することになったときは積極的に取り組みたい。」「避難所を運営するのに、こんなにも準備から普段の運営まで人が必要ですることも多くて判断しないといけないことも多くて大変だと思いました。不審者とか、何

か困ったことがあった時に責任を取るのも、ボランティアだと誰がするって話にもなると思う。」「実際避難所開設準備を行って、必要なものを集めることや、各スペースの配置などすることが多く、大変な作業だと感じました。」「福祉避難所の説明を聞いて、どこの場所に何が必要なのかや、一人分の範囲や段ボールベッドの仕組み、必要なものが置いてある倉庫の場所など必要なことをたくさん知りました。大学在学中に大きな災害が起こった時に私は、この体育館に避難することになる気がするので、今日学んだことを忘れないように、もしもの時は、生かせるようにしたい。」代表的なコメントを取りまとめた。現実には当然この経験以上であることは言うまでもない。言葉に簡単にはできない経験も、実生活で、一度にたくさんの方が経験している。また、対人援助学会として、対人援助学マガジンの機能も生かして、できることをしていきたい。その時は皆様も一部を担ってください。

編集員(オオタニ タカシ)

56号の編集会議は過去最速で、その場で各原稿のページ数が確定し、後は目次作りと原稿のページ入れを残すだけとなりました。その後は今の仕事のこと、社会のこと、次の大会のこと、マガジンのことなど、話は尽きません。

その話題のひとつが、メジャーリーガーの大谷選手のこと。話題性と老若男女を問わない知名度は本当にすごいです。私自身は同じ苗字であることもあって、その知名度と人気の高さをほかの人よりも強く感じているかもしれません。その一つが、保育園や幼稚園など、子どものいる場に行った時のことです。見知らぬ大人が園内にいると「誰のお父さん?」「誰ー?」と聞かれるのは定番のやりとりです。ここで「大谷です」と自己紹介をすると…子どもたちは「SHOHEI?」「オオターニサーン!」と口々に盛り上がり、私もちゃっかりその人気にあやかっけて子どもとの関係作りを助けられています。

もうひとつ、能登半島の震災のことも話題にあがりました。団編集長からの具体的なご提案もあり、マガジンでも何かできることがないか、模索していく方向で検討が進みました。マガジンという仕組みがあるからこそできることをする。このような可能性が開かれていることに、まずは感謝します。

対人援助学マガジン

通巻56号

第14巻 第4号

2024年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第57号は2024年6月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年5月25日!

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

こういう趣向は目先が変わって一寸いいと思ってたまにやるのだが、漫画家仲間からはたいてい馬鹿にされる。ソフトに組み込まれた柄なんかを使って…ということらしい。

センスがいいと思ってやっているわけではなく、でも面白いジャンなんて思うのだ。その結果、レギュラーの表紙ラインナップからも浮いてしまうのだが。

2024/3/15